



うち だ ゆ き  
内田有紀さん(40)＝パン職人・サーファー

—イランカラハテ(アイヌ語樺太方言で、こんにちば)。今は奄美大島(鹿児島県)にお住まいなんですね。

はい。出身は埼玉県なんです。父の仕事のえいきょうでコンピューターが身近にあったこともあり、情報処理の勉強をしたんです。パソコンの講師やホームページ作成、ソフトの販売などをしてきました。

23歳のとき、ボディーボードを始めたんです。それが、どんどん好きになっていった、3年ほどして大きなボードに乗るようになりました。田舎の暮らしが好きだし、海のそばに住みたいと思って、あちこち旅してから奄美に落ち着きました。時々ハワイに何カ月か住んで働きながらサーフィンをすることもあります。

—パソコン関係の仕事からサーフィン中心の暮らしに。今はパン屋さんもしている。

姉のえいきょうでパンを焼き始めたんですけど、これで独立してみたいなと思って。ライ麦を使ったドイツ風のパン

ンや、イタリア風のパン、日本でおなじみの白いパンなどを焼いて売っています。日によりますが、朝は早いですね。午前2～4時くらいに起きます。ぜんぶ1人でやっているの時間がかかります。

—内田さんは、樺太アイヌの家系なんですね。

母が子供のころは家の中にトンコリ(弦楽器)やアイヌの歌が聞こえていたというし、うちがアイヌの家だっているのはなんとなく知っています。奄美に住むようになって、この土地独特の暮らしや歴史にひかれたんです。それで、アイヌのこともあらためて調べてみたら、トンコリや、ひいおばあちゃんの名前がインターネットに出てきておどろきました。家族の間でしばらくアイヌとか、ルーツをたどることがブームになりました。今の自分には今の暮らしがあるけど、自然な形で昔の人の考えや知恵も大切にしていきたいです。

◇  
このコーナーでは、さまざま仕事をするアイヌの人にインタビューします。

シヌイエやバナイと呼ばれ、明治時代の終わりがまで続きました。女性は10歳を過ぎたころから口元からほおにかけて手のこつから手首の少し上まで、何回かに分けて入れます。顔に入れることもあります。刃物で傷をつけ、シラカバ、ホオノキ、ノリウツギなどを焼いたすすをぬりこんで色をつけます。男性が入れずみをするのはまれですが、狩りが上達するよう指にほったり、口が達者に

#### ■入れずみ

「きみ、これ知ってる？」の意味になるように「口角にほることもありました。はるか昔、人間に文化を教えた神の妹が入れずみをして、いたのが始まりだと言われています。その美しさから入れずみを入れた女性は多かったようです。

入れずみを終わらせないと、結婚ができな、あるいは夫が儀礼に参加できなくなるといわれ、女性が一人前になるために必要なこととされました。(葛野大喜 札幌大学ウレシパクラブ4年生)

### タンバエエラムアイン?

「きみ、これ知ってる？」の意味



交易から帰る途中、荷物から美しいむすめ飛び出した

私はたいそうおどろいて、息子もおどろくだろうと思い、だまってむすめをにらみました。するとむすめは、泣きながら訳を話しました。「私はあなたが交易に行っている長者のむすめです。父は私をかわいがり、外にも出してくれないので、結婚することになる方がいると聞きながらも、どんな方か見たこともありませんでした。一目みたという気持ちがおさえられず、こっそり見てみたら、息子さんがありにも立派な方で好きになってしまいました。そこで荷物の間にしのびこみ、今までかくれていたのです。どうぞ私を連れて行ってください。父は私がいなくなったことを知れば、私を連れもそつとするでしょう。その前に、アイヌのかみ形にし、入れずみをしてください。そうすれば、父も私を見つけれないでしょう。そうしていただけないなら、私をここで海にすててください」と言っていて聞きました。

かみを切り、入れずみをする、とびきり美しいアイヌのむすめになった



船に乗りこみ交易に行くルートを教えながら、長者の村に着きました。長者は息子を見ると大喜びし、「ごちそうとお酒をならべてかんげいしてくれました。そうして楽しく過ごしながら、『そういえば長者のむすめがいるという話だったが、1度も会ったことがない』と思いました。



親しくしている和人の長者との交易。このようすを、むすめが見ていた

翌日、帰ると告げると長者は息子に「来年からは一人でも毎年来てください。ゆくゆくは私のむすめと結婚して、うちのむこになってくださいね」と言いました。そして交易の品をたくさん積んでもらって、船出しました。そうして、帰り道の真ん中まで来たころ、船の中で荷物が動いたような気がしました。すると、なんと荷物の中から美しいむすめが顔を出しました。

### 他民族へとつぎ恋貫く

江戸時代以前のアイヌ民族は、さかんに交易物の取り引きをしていました。今回のお話の中では、アイヌの村長は和人の長者とても良い関係です。なのに、なぜ長者のむすめは家を飛び出したのでしょうか。それは、どちらも一人づ子だからかもしれませぬ。昔は、その家庭の子供が「家をつぐ」ことが、とても大切だと考えられていました。

子供が一人の家では、親も子供には家についてほしい(結婚相手に来てほしい)と考えたこと、さらに民族のちがいのため、子供を出したくない」という親の気持ち、余計に強いかもしれません。それで縁談がなしになるかもしれません。

そこでむすめは思い切った作戦を立て、村長の妻もそれを応援しました。アイヌの物語では、女性も恋のためにガンガン行動します。



### おひめさまの入れずみ

日高管内新ひだか町 織田ステノさんの話

アイヌ民族博物館アイヌ語アカイブスより